

研究分野	資源評価	機関・部	水産総合研究所・資源管理部
研究事業名	資源評価調査委託事業		
予算区分	受託研究((独)水産総合研究センター)		
研究実施期間	H17～H25		
担当者	高橋 宏和		
協力・分担関係	なし		

〈目的〉

日本の周辺海域で利用可能な魚種の適切な利用と保護を図るため、科学的客観的根拠に基づいて資源評価を行うために必要な関係資料を整備する。

〈試験研究方法〉

1. 漁場別漁獲状況調査

対象漁業：小型機船底曳網漁業(八戸みなと漁協)

日本海ベニズワイガニかご漁業(新深浦町漁協岩崎支所)

調査方法：漁獲成績報告書

2. 生物情報収集調査

対象地区：県内 44 漁協及び八戸魚市場

対象魚種：(太平洋) スルメイカ、ヒラメ、スケトウダラ、マダラ、マイワシ、マサバ、カタクチイワシ、キチジ、イトヒキダラ、ズワイガニ、ヤナギムシガレイ、サメガレイ、ゴマサバ、マアジ、キアンコウの計 15 魚種

(日本海) スルメイカ、ヒラメ、スケトウダラ、マダラ、マイワシ、マサバ、マアジ、マガレイ、ハタハタ、ブリ、ベニズワイガニ、アカガレイ、ニギス、マダイ、ホッケ、ホッコクアカエビ、ヤリイカ、ウルメイワシ、カタクチイワシ、ムシガレイ、ソウハチの計 21 魚種

調査項目：漁獲量及び漁獲金額(両項目とも月別、漁業種類別、銘柄別毎)

調査方法：電子データの収集

3. 生物測定調査

対象地区：4 漁協(新深浦町、鯨ヶ沢、外ヶ浜、八戸みなと)及び八戸魚市場

対象魚種：ヒラメ、スルメイカ、マダラ、キチジ、マアジ、マイワシ、カタクチイワシ、マサバ、ブリ、マガレイ、ハタハタの計 11 魚種

調査項目：体長、体重、性別、生殖腺重量

調査方法：標本買上げ

* 上記の他に新深浦漁協沢辺支所においてマダラの全長測定を実施。

4. 資源動向調査

・脇野沢村漁協においてマダラの全長測定及び漁獲魚の標識放流を実施。

・小泊～大間越漁協のウスメバル及びヤナギムシガレイの銘柄別漁獲量を調査。

5. 漁場一斉調査

スルメイカ及びハタハタを試験船により調査。

〈結果の概要・要約〉

資源評価対象魚種のうち、広域資源回復計画の対象となっている日本海北部海域(青森県～富山県)のマガレイとハタハタについては以下のとおりであった。

青森県日本海海域のマガレイの漁獲量は、平成5年以降減少傾向にあり、平成21年は30トンであった(図1)。マガレイの主漁期である1～4月の新深浦町漁協の魚体は、標準体長12～28cm(モード:15cm、17～18cm)の範囲であった(図2)。

また、青森県日本海海域のハタハタの漁獲量は、平成17年の844トンピークに減少に転じたが、

平成20年に1,358トン記録し、平成21年の漁獲量は813トンであった。(図3)。ハタハタの主漁期である12月の新深浦町漁協岩崎支所の漁獲主体は、メスは標準体長19cm台、オスは標準体長17cm台で、体長と年齢の関係から3年魚と推測された(図4)。

各調査結果を(独)水産総合研究センターへ報告した。

〈主要成果の具体的なデータ〉

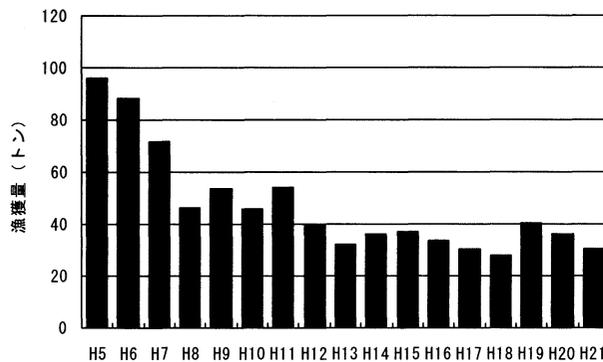


図1 日本海マガレイ漁獲量の推移

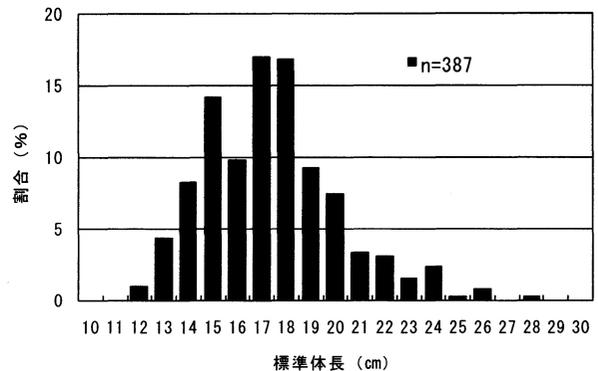


図2 日本海マガレイ体長組成 (1~4月:新深浦町漁協本所)

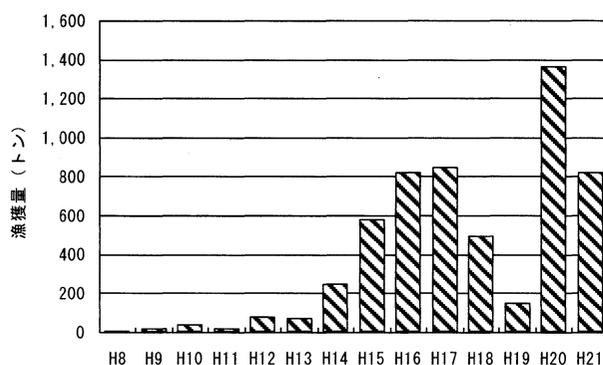


図3 日本海ハタハタ漁獲量の推移

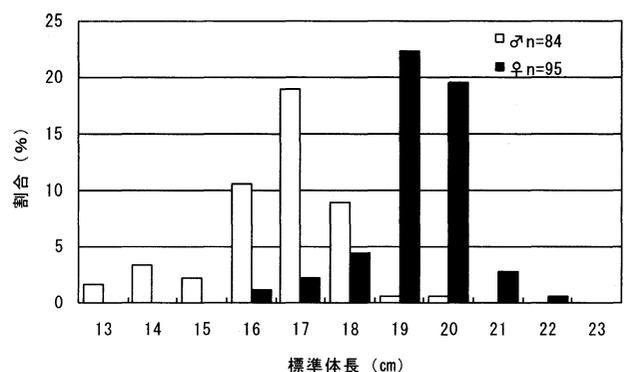


図4 日本海ハタハタ体長組成 (12月:新深浦町漁協岩崎支所)

〈今後の問題点〉

特になし

〈次年度の具体的計画〉

継続して調査を実施する。

〈結果の発表・活用状況等〉

漁業者、学識経験者、行政機関が参加する資源評価会議で資源水準や動向を検討し、その結果は、水産庁が「我が国周辺海域の漁業資源評価」として印刷すると同時に、インターネットにも掲載し公表している。